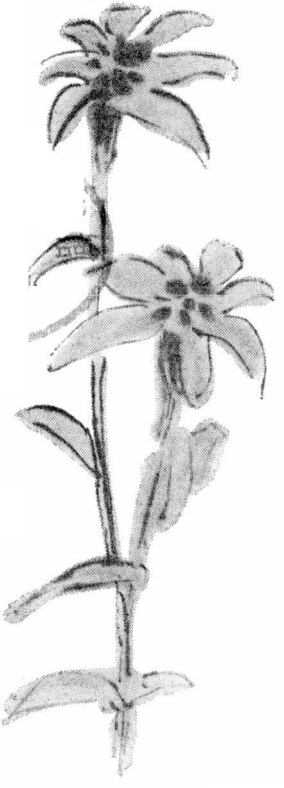
女性の美しく

保坂弘司



彌生書房刊

保坂弘司（ほさか ひろし）
1906年，新潟に生まれる。1930年，早大文学部卒業。1932年より旺文社で雑誌編集，参考書著述にあたる。1948年，旺文社退社後，学燈社を創立。現在学燈社会長，昭和女子大教授。著書『源氏物語・その語法と評釈』（全2巻）『大鏡新考』（全3巻）『若き知性に』『美しき憂悶に』『生きゆくの記』『明日の門』等多数。
現住所（〒156）世田谷区松原4—14—19

©1979　　検印省略

女性の美しく

1979年10月5日　初版印刷
1979年10月15日　初版発行

著　者　保坂弘司
発行者　津曲篤子
発行所　株式会社 彌生書房

東京都新宿区中町18　電話・東京(260)3707(代表)

印刷・新興印刷(株)　製本・大口製本印刷(株)

〈落丁・乱丁本はお取りかえいたします〉
0095—79180—8525

はしがき

テレビのスイッチをひねると、なんとかかとかいう評論家の、ものすごくスピーディな饒舌が聞えてくる。まことにいさぎよく、逞しいが、そこはかとなく匂うさかしらが、なにかむなしいのである。もっと思い入った、しんそこの発想があるのではなかろうか、こんなさかしらとはうらはらな、凡庸な鈍重な、しかし、それなりに真実にふれた——物言いがあってもいいのではなかろうか、と思う。

ここに書かれたいくつかの文章は、そうした反世代的な、ぼそっとした発言なのである。現代のはなばなしいマスコミ的発言の裏街道をとぼとぼと歩く、孤独な散歩者のひとりごとなのである。

女性が好きなのである。それは、男性としてあたりまえのことかも知れないが、それにしても、たまらなく好きなのである。女性の原初的なもの——〝原点〟という言葉を使おうとして、はっとそのキザさがいやになった——その憧憬を抑えることのできないこころなのである。そのこころが、私という男に書かせた、永い年月のあいだの、たどたどしい文章を、ここに思い切って、公けにするわけである。こんな私に、佐藤春夫の『殉情詩集』の自序のことばが聞えてくる。

われ今日人生の途なかばにして愛恋の小暗き森かげに到り、わが思ひは転た落莫たり。わが胸は輞の下に砕かれたる薔薇の如く呻く。心中の事、眼中の涙、意中の人。児女の情われに極まりては偶成の詩歌乃ちまた多少あり。げに事に依りてわが身には切なくもあるかな、わがこの歌。然れども既に世に問はん心なければ、わが息吹なるわが調べはいつしかに世の好尚と相去れるをいかにせん。われは古風なる笛をとり出でていま路のべに来り哀歌す。節古びて心をさなくただに笑止なるわが笛の音に慌しき行路の人いかで泣くべしやは。たとひわが目には水流るるとも、知らず、幾人かありて之に耳を仮し、しばしそが歩みを停むるやいかに。
嗟吁、わが嗚咽は洩れて人の為に聞かれぬ。われは情痴の徒と呼ばるるとも今はた是非なし。

と。まことに奇妙なこころがここにある。「世に問はん心なければ」といいながら、あえて世に問い、「われは情痴の徒と呼ばるるとも今はた是非なし」とふてくされる。この二律背反のふてくされの命題の中に、世に問う隠微なところがあるのだ。

私は、佐藤春夫とちがって、〝女性という——このたまらなく好きなもの〟に関しての数々の発言を、臆面もなく書き綴って、公けにする。むろん〝情痴の徒〟と呼ばれることを覚悟のうえでのことである。だが、〝永遠〟という時間を想定して、ものを考えてみると、新しいとか古いとかを超えて、なにかそこに、男と女としかいないこの人間の世界に、叫ばれてもいい真実なことばがあ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

るような気がするのだ。それが何かはわからない。その暗闇に手探りを試みたのが、この数々の断章なのである。

若い日の登山の体験を思い浮かべる。渓谷を辿っていると、あっという間に濃霧に襲われる。直ぐ前を行く友が、にわかに掻き消される。女性について判っていたものが、まるで判らなくなるといった感じは、ちょうどそんなふうでもある。別のことばでいえば、それは不気味な深淵である。だから、私の手探りを、もう一つ別の言い方をすれば、深淵に向かっての手探りである。中国の古いことばに「暗中模索」というのがある。いみじくも、これは女性への無限の関心をもった暗中模索の書である。

その時々に書き散らしたものを、掻き集めたので、執筆の時代が前後している。今日の時点で、時代感覚ずれのした表現がいくつかあり、いささか恐縮なことであるが、今となっては調べるよしもなく、目を瞑って、この書を上梓する。お許しをねがいたい。

昭和五十四年十月、秋も深くなる頃、

著　者

女性の美しく　目次

はしがき……一

I　女性の美しく

1　若き日の無償の愛……一〇
2　生花の師匠と……二一
3　一枚の絵はがき……二七
4　スチュワデスの微笑……三一
5　巷を明かるく、ユーモア礼讃……三五
6　ゆきずりの幸福感……四一
7　若いこと、美しいということ……四五
8　金閣寺の美学……五〇
9　季節のことば……五五
10　競争者……五九
11　一つの死をめぐって……六二
12　さかさまに行かぬ年月よ……六八

Ⅱ 旅と女性と文学と

1 奥州路にて……七二
——雪の温泉場の女——
2 越路にて……八九
——車中の女子高生——
3 唐津にて……九三
——古代の恋を求めて——
4 筑紫路にて……一〇二
——道連れになった八代の女——
5 熊本にて……一〇八
——漱石を追うて——
6 宮崎にて……一一六
——永遠の相思像——
7 会寧にて……一二五
——ひとりの従軍看護婦——

Ⅲ 手紙の中の女性像

1 二つの若い悩みに答える……一三四
2 芸者の子……一四〇
3 そら恐ろしいもの……一四六
4 アルバイトの君に……一五一
5 慕情に苦しむ君に……一五四
6 最後の手紙への返事……一五七
7 文学サークルを作る君に……一六二
8 風変わりな手紙……一七〇

Ⅳ 回想のノートから

1 はにかみ屋……一八〇
2 潮風の中の記憶……一八六
3 私の名前……一九〇
4 ともだち……一九六

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

I　女性の美しく

1　若き日の無償の愛

一

大学に合格して、新潟から上京した私は、大分から上京した二つ年上の女性にめぐりあった。花曇りの夕べの、東大に近い本郷の、春木館という下宿の彼女の部屋であった。吉村美知子といった。大柄で、やや丸顔で、大きな、しかし顔に調和した瞳が、全体の輪廓をひきしめるように涼しかった。この南国の少女と、北国の少年との出会いには、こんな経緯があった。

二

私は物を書くことが好きで、中学生の頃から仲間を集めて『若人』という謄写版雑誌をつくり、盛んに詩歌だの、小説だのを書きまくっていたが、中学三年の時、当時実業之日本社から出ていた雑誌『日本少年』の懸賞小説に応募し、「女教師」という短篇を送ったところ、首席で当選した。あちらこちらの文学少年や少女たちから、ファンレターが舞い込んだが、その中に大分県のFとい

う、やや年上の文学少年があって、情熱的な手紙を寄せてきた。

——貴君の「女教師」という小説の、女教師と少年との関係は、私の過去にあまりにも似ている、貴君もきっとそういう過去の体験を書かれたに違いない。貴君とはなにか兄弟のような気がする。遠く離れてはいるが、生涯の交際をしたい、というのである。

私もかつて味わったことのない感動を覚え、熱っぽい返事を書いた。そして、激しい手紙の応酬がはじまり、それは同性愛に近い文通にまでエスカレートしていったが、生来病身だったらしいFは病床に横たわる身となった。——病名はついに明さなかったが、肺結核ではなかったかと思う。そして、かなり重症になった時、彼は自分に許婚のあることを打明けてきた。その人が美知子であった。

Fの口写しのような美知子の代筆の手紙が私に来るようになった。Fの病状の悪化をいたむ心とはうらはらに、美知子の筆跡のやさしさや言葉づかいの品のよさに、どんな女性だろうかと想像する心のときめきを抑えかねた。それに、はじめFの口写しだった手紙が、看病疲れのせいか、病人のわがままへの愚痴などが混じるようになり、それとともに、そこはかとなく不貞めいたものが私の心に揺れた。

そんな状態が半年も続いたであろうか、ある日、Fからの直接の手紙が届いた。それには、症状が少し快方に向かったこと、医者からペンを持つことを許されたこと、二人の間の文通がもと通りにできるようになったことなどが、踊りあがるようなよろこびで書かれてあった。もちろん、私は

祝福のこころを細々と書き送ったが、それとはうらはらに、美知子との文通の遮断という、どうにもならぬものへの恨めしさがやり切れなかった。

Fとの文通は、形のうえでは正常に戻ったわけだが、病気がさせるわざか、感情の起伏が激しくなったようだった。私の手紙の内容に対する愛憎の反応が次第に激化してきて、ついに文通に破局が来た。

ある日の彼の手紙は、書き出しから妙に感傷的だった。いぶかしみながら読んでいった私はぎくっとした。彼の弟の自殺を報じた手紙だった。だが、ちょうど近親の死に逢って、人間の死について深刻に考えていた時なので、ぎくっとはしたものの、若い主観は、親友の悲しみを思う心より、死への思索が先行した。そこで、私はこんな返事を書いた。

貴君の嘆き、お慰めの言葉も見出せません。いや、下手なお慰めの言葉はかえって貴君の嘆きを深めることになるかも。それで、ぼくは月並みな弔詞は止め、二人の友情の名において、率直にぼくの感想を書かせていただきます。

死――この人生の終止符は、貴君もぼくも含めて、すべての人類の上に明日にも打たれるかも知れない冷厳な事実です。一つの魂が地上から消えるということは、肉親の情、友愛の情において、それぞれ哀傷限りないことでしょうが、結果の側に立って眺めると、この人生の冷厳な鉄則に順々に（あるいは順不同に）従いゆくことなので、そこには涙も笑いもないことなのでしょう。

病身の貴君が長生きし、健康なぼくが短命であるかも知れません（いや人生の事実は往々そうあるものです）が、それにしてもどれほどの順不同でしょうか。どちらが先にしろ、その日が来たとき、泣くのはよして、静かに祈りを捧げることにしましょう。

ただ、弟さんの場合、若い生命が無惨に絶たれたということは、別の意味で惜しまれます。将来に向かって伸びる可能性が中断されたということは。しかし、やはりぼくは弟さんの意志を尊重したいと思います。環境か愛情かと対決し、可能性を一瞬に燃焼しつくされた弟さんは、やはり弟さんの方式で人生を生きて、終局に到達されたのに違いありません。静かに祈ろうではありませんか。

しかし、私のこの返事は、病身の彼の心をいたく刺激したらしい。折返し届いた彼の、便箋一枚の短い手紙には、怒りを叩きつけるような激しい言葉が数行並んでいて、「君のような薄情な男とは二度と交際したくない、今日限り絶交する」とあった。

三

一切を失った、という青春の慟哭が身も世もなく私をゆすぶった。しかし、若い魂の創痍からの立ちあがりは、意外に早かった。手紙というはかない契機で結ばれたあの二人のペンフレンドに、なぜあんな苦悶をしなければならなかったのかと、過去の自分が滑稽にさえ追憶される日が来た。

その頃のある夜、日記にこう書いた。

人は誰でも、結局はみな現実主義者なのだ。生きるということは、自我の本能から現実をたしかめることなのだ。不幸に泣くのも、幸福に酔うのも、愛に苦しむのも、恋に嘆くのも、すべては現実の自己をたしかめ、生の実感を味わうことなんだ。FのこともMのことも、いくほどかの愛別離苦の時を過ぎた今は、なんの苦しみもなく思い出せるではないか。ぼくはFやMを愛していたのではなく、ぼく自身だけを愛していたのだ。それでなくて、どうしてこんなに恬淡としていられるものか。——ともかく、ここにぼくの青春の一つの出来事が終末を告げたのだ。悲しいことだけれど、それでいて、いい知れずほっとしたよろこびを覚える。

書きながら、これは自分のほんとの気持だと、自身に言い聞かせるこころがあった。しかし、事実は意外な発展の形をとった。

数か月の後に、美知子から手紙が来たのである。——ある事情で、Fと別れることになった。理由は聞かないでほしい。私の家は、母一人子一人の生活だが、母は傷心の私を慰めるつもりか、東京の学校に進学をすすめてくれる。私も母のすすめに従いたいのだが、女学校を出て一年というブランクがあるので、臆病風が吹く。あなたも再来年の三月には東京の大学に進むとFから聞いていたので、私も同じ年に東京で受験したい。ついては、いろいろ教えてほしい、という文面であった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com